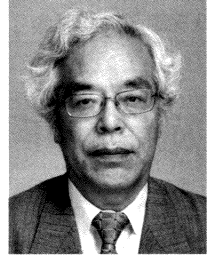


池田家に伝わる 「改正増補 英和对訳袖珍辞書」



三 浦 孝 夫（萩高20期、S43年卒）

幕末の奈古村に生まれ、志士として活躍した池田梁蔵。当時の書籍類が池田家（東京都渋谷区）に今日まで伝わっているが、その中に、慶應3年に刊行された英和辞書がある。今回はこれを紹介する。

嘉永6年（1853）のペリー来航以来、急増した英語のニーズに応えるため、幕府は英和辞典の編纂を命じた。これを受けて堀辰之助が編集主幹となって文久2年（1862）に刊行されたのが、我が国初の本格的な英和辞典「英和对訳袖珍辞書」である（袖珍辞書とはポケット辞書のこと）。初版200部が印刷され、2両2朱（当時、米が150キロ買えたという）という高額にもかかわらず、たちまち売り切れたという。この初版をもとに、堀越亀之助などが補訂を加えて慶應2年（1866）に刊行したのが「改正増補 英和对訳袖珍辞書」（1刷）である。1000部印刷され、こちらもよく売れたようだ。そして翌慶應3年（1867）に同2刷が刊行された。池田家に伝わるのはこの2刷である。では、なぜ池田家にこれがあるのだろうか。

辞書を手にしてみると、表紙の見返しに五言絶句の漢詩が書かれており、梁蔵の号である「青波」の署名がある。また序文の脇の空欄にも池田梁蔵の名前がかすかに読みとれる。さらに、裏表紙の見返しには和歌が書かれている。これらのことから、これが梁蔵愛用の辞書だったことは間違いない。

慶應2年、長州藩は四境戦争に勝利を収めると討幕に向けて大きく踏み出す。慶應3年10月、梁蔵は徳山藩（奈古は徳山藩領）の命を受けて江戸に潜入し、藩命を果たして下士にとりたてられる。この江戸潜入時に、梁蔵はこの辞書を買って求めたものと思われる。というのも、梁蔵には大きな野望があったからだ。

それは、ロンドン渡航である。

鳥羽伏見の戦いに勝利して戊辰戦争の帰趨が決した慶應4年（1868）3月、徳山藩世子の平六四郎（元功）は兵庫からロンドン渡航の旅に出た。梁蔵はこの船に密かに乗り込んで、同行を企てた。しかし、長崎で発覚して同行は許されず、上海で下船することになった。上海にとどまること8カ月、自費でのロンドン渡航を執行し、翌明治2年（1869）初め、遂にロンドン上陸を果たす。ロンドンで世子平六四郎と再会し、平六四郎の援助を受けてロンドン、パリと遊学し、翌明治3年（1870）初め帰国したのである。

この間、梁蔵がこの辞書を携行していたであろうことは間違いない。辞書は梁蔵のロンドン渡航の証である。

ところで、英学史の研究者が2006年に発表したところによると、「改正増補 英和对訳袖珍辞書」2刷は全国で66本の現存が確認されている。もちろん、池田本はこの中には含まれていない。うち1本は山口市の山口県立図書館にある。同館によると、昭和10年5月1日、個人から購入したものであるという。同館では今年2月から3月にかけて、山口商工会議所が主催して毎年実施している「山口お宝展」の一環として、この辞書を一般公開した。「お宝」なのである。（東京指月会事務局長）